

# アメリカの手話表現を取り入れた英語学習の研究

～Signed English for Japanese の創造～

聴覚障害 英語教育 手話 アメリカ手話SE SEE SE4JS

九州聾教育ネットワーク英語教育

〒862-0901  
熊本県熊本市東区東町3丁目14番2号（熊本聾学校内）

<http://sign4classroom.sakura.ne.jp/>

## 1. 研究の背景

聴覚障がい児童生徒のための特別支援学校は、多くの県において1校しかない。そのため職員が転勤すると別の障がい種の学校になるため、専門性の継続が難しい状況にある。また、手話を言語として認める言語法の成立を目指した昨今の動きは大きくなってきている。手話を取り入れたコミュニケーションや授業は積極的に進みつつあり、児童生徒の学力向上も図られ、聴覚障がい生徒の大学進学も増加する傾向にある。

このような状況の中で、聴覚に障がいを持つ児童生徒達がどのようにして英語学習を進めていくか、どのようにして、英会話を進めていくか、英語の書く力を高めていくかについて、九州の聴覚特別支援学校・聾学校(以下、聴覚支援学校)の英語担当者は、ともに研修しながら進めてきている。これにともない、本校を中心とした九州の聾教育の英語教育の担当者達が合同で研修し、より効果的な指導法を模索してきている。

## 2. 研究の目的

本研究では、聴覚に障がいのある生徒の英語学習において、書く力、話す力を高めるための効果的な授業を創造する。そのために、アメリカの手話表現をどのように取り入れたら、生徒の英語学習における負担感を少なくしながらも、学力向上に結びつけることができるかについて研究をする。

## 3. 研究の方法

本研究は、次の4つの流れで研究を進める。

- (1) 九州内の各聴覚支援学校の英語担当者の困っていることをアンケートにより集約する。
- (2) 助言等で解決できる内容は、合同研修会を持ち、意見交換や情報交換会を行う。
- (3) より効果的な授業作りに向けて、手話の動画集をweb上に公開し、授業等で活用しながら、更に改善していく。
- (4) 海外の聴覚障がい関係の学校と連携したネット交流等を企画し、聴覚障がい教育における国際理解教育について考察する。

#### 4. 研究の内容・経過

(1) 九州内の聴覚支援学校で困っていることおよび工夫していること等についてアンケート

調査を実施した。その結果、以下のことが課題となっていることがわかった。

- ①ローマ字の学習は、参考になるのか、邪魔になるかわからない。
- ②フォニックスをどのように取り入れたらよいかわからない。
- ③単語の発音のカタカナ表記は、だめなのか。
- ④英単語の覚えさせ方がわからない。定着が難しい。
- ⑤文法事項を手話でどのように説明したらよいかわからない。
- ⑥アメリカ手話を使った方がいいのかどうかわからない。
- ⑦聴覚支援学校では、英会話は可能なのか。英語で授業をするということは可能なのか。
- ⑧日本語もきちんと身に付いていない生徒がいるのに、聴覚支援学校では英語は必要なのか。

(2) 合同研修会では、(1)のアンケートの結果について、下記のように検討してきた。

① ローマ字は、一般の学校では、大方「ローマ字と英語は発音するとこんなに違うね」と授業で確認することが多いが、聴障の生徒にとっては、逆に、「こんなに似ているね」と教えてもいいのではないだろうか。「バナナ」と「banana」読み方で、構音がしっかりしていない聴障の生徒には、むしろ、「似ている」あるいは「同じ」と伝えることで、覚えやすくなるのではないか。発声はなくても口形を作ることが出来る生徒は、口が「バナナ」と動くことで、相手に伝わりやすくなると思われる。

② フォニックスを聴覚支援学校でも導入しているところがある。問題は、いつ導入するかというところにある。一般の学校でも学習開始時に数時間かけて丁寧にフォニックスを定着させる指導者もいる。学校の中で指導法が異なる場合、担当者で異なる指導計画で進める学校もある。

聴障の生徒にとっては、ローマ字の読み方では対処できない読み方に出会うので、いつかは導入する必要がある。聴覚支援学校でも、英語の学習開始時に導入している学校もある(京都府立聴覚支援学校等)。しかし、学習の初期段階で発音関係に時間を使うのは、それだけでなく「発音」に苦手意識を持つ生徒が多い中では、学習者の心理的負担は大きい。また、その必要性もまだそんなに感じてはいない時に学習するのは、聴覚の障害の有無にかかわらず、学習者の意欲は低いことが多い。そこで、導入に適する時期はいつ頃がよいか検討してみた結果、学習者がおおよそ100個以上の単語を覚え、「a」が/a/や/ei/の場合があつたり「i」が/ai/や/i/の場合があつたりして、「どうなっているんだろう、え～」といった、困り感を感じ始めたときが一番身につくように思われる。その時にしっかりフォニックスの基本を身につけさせると効果的である。また、「フォニックスの基本」とあえて書くのは、生徒の聴力や発音発語の力に応じて、「r」や「l」の違いは、そもそもが難しい場合が多いので、こだわらないと割り切ってもよいのではないかと考える。

③ カタカナで単語の読みを記述することに、一般の学校では抵抗を感じる指導者が少なくない。しかし、一般の学校では、少なくとも教師やCDが範読してくれるはずである。聞こえない、聞こえにくいから、「音を目で見る」のだと考えると、カタカナで表記することは問題はないと思われる。明晴学園など一部の聴覚障害関係の学校では、カタカナでは表すべきではないと考え、発音記号を導入しているところもある。アルファベットも単語もまだまだ定着していない時期に発音記号まで導入するのは学習者の負担が大

きいと思われる。聴覚支援学校では、聴障の生徒を相手にするわけだから、割り切って、カタカナ表記を活用したい。もちろん、高等部などある程度学習が進んできた生徒は、発音記号を知ることにより、いつでも発音を自分で確認しながら自立して学習を進めていけるようになることは大切である。

その場合、どこまで発音にこだわるかである。人工内耳や補聴器によってある程度聞こえがある学習者は、「b」や「v」の違いもできるようになりたいということも少なくない。そのためには、英単語のカタカナ表示に一定の共通性があるとよい。聴覚障害、視覚障害の学生のための専門の大学が筑波技術大学の聴覚障害の学生を長年指導してきておられる松藤教授は、中学生から使用するには、ベーシックジーニアス英和辞典を勧めている。これは、カタカナの表記に揺れがないことや大切な発音の違いはしっかり明記してあるが、表記しすぎていない(区別しすぎていない)こともよいからである。ここでいう大切な発音の違いというのは、「no」や「know」は、「ノー」ではなく、「ノウ」と表記されていることを意味している。辞書によっては、カタカナの表記の中にひらがなも混ぜて表現してあるものもある。聴者は、その辞書の発音表記の定義を読んで付属のCD等を聞くと、カタカナの「ル」とひらがなの「る」の違いが聞きながら理解できるかもしれないが、聞こえない生徒にとっては、ひらがなとカタカナに音の違いを付けること自体が無意味であろう。

- ④ 単語の定着のさせ方が難しいのは、どの学校でも悩んでいることの一番である。ここでは、聞こえに関係なく、発音・発語が出来る生徒は、声を出しながら単語を書いて練習する。発語はないが、口形ができていない生徒は、口形をつけながら書いて覚える。発音・発語も口形もない生徒は、指文字で発音を表現しながら書いて覚える。このように、複数の手段を同時に表現しながら、あるいはあらゆる可能な手段をすべて動員しながら全身を使って、単語を覚える練習をする必要がある。

また、音声は伴っていないが、単語の読み方を意識しながら覚えようとする時に気をつけることは、「音韻」の塊を大切にすることである。音韻に気をつけながら単語を覚えると、単語の中での区切りが見えてくる。そうすると単語の中のさらに小さな塊に気づきそれを覚えることで、長い単語も書くことができる。筑波技術大学の長南教授によると、黒板をノートに写すとき、1つの単語をひとかたまりとして書けないことはよくある。しかし、指導者が特に注意する必要があるのは、アルファベットを1つ1つ写している場合である。それは頭の中では、それは「絵」と同じような認識であり、単語あるいは文字として認識されていないと教師は理解すべきであるという。

- ⑤ 九州内の聴覚支援学校では、文部科学省の特別支援学校機能強化モデル事業の特別支援学校ネットワーク構築事業を受け、平成26年度、小中高生や教師が授業や学校生活で使用する手話表現の動画作成を行った。これまで調べた中では、手話単語の辞典やwebサイトはたくさんあるが、文章の表現サイトはない。この理由は、「日本手話」と「手指日本語(日本語対応手話)」の対立による。聾文化を大切にすれば「日本手話」を使用することは大変重要である。しかし、聾学校に転勤してきて、すぐに授業が始まる状況において、「日本手話」を求められても難しい状況にある。それにもかかわらず、「日本手話と日本語対応手話には対立はない。そもそも日本語対応手話は手話ではないのだから」という「日本語対応手話」への批判がある。聾学校に赴任したばかりの教師は、手話の勉強をしながら教材研究を進めなければならない。そのためにも手話の動画集があったらよいが、文章をあえて手話で表現した動画を作成、一般公開するには、勇気を必要とする。それは、よほど手話に精通した教師でなければ、どうしても「日本語対応手話」になっ

てしまうからである。まして、前述のような対立の渦中にありながら、作成した動画を一般公開しようとするには、相当の覚悟も必要である。

しかし、私たち授業者は手話通訳士ではない。担当する授業でいかに生徒たちに学ばせることができるか、彼らの考える力を伸ばしていけるかと考えたときには、「手話」に限らずありとあらゆる手段を持って、私たちは授業を創造していく。そこでは「わかる授業作り」が主であって、聾者も聴者も同じ学習者である。また、「手話で表現されたら先生の言っていることがわかるが、テスト問題を読んでも何を聞かれていて、何を答えるべきかがわからない」という生徒の実態もよくある。これは、生徒の日本語力の課題である。そこで、「日本語対応手話」は、聾文化からすると「手話」と位置づけたくはないかもしれないが、英語でいう「学校文法」のように、「学校手話」と割り切って活用すれば、授業の内容もわかるし、文章で活字化された試験問題も理解できる力を身につけるという意味で、「日本語対応手話」は、将来許容されていると思われる(この場合、文字通り表現してしまい意味不明な対応手話とは区別している)。授業者のためにも、学習者のためにもきつと学習活動においては役に立つと思ひ動画集を作成した。

動画作成にあたり、たくさんの議論があった。作成することそのものにも反対意見があった。しかし、きつと勉強をしたい学習者や4月からいきなり手話で授業をすることを求められる授業者にとって、必ず助けになると確信している。手話表現者は、九州内の聴覚支援学校の中でも手話が堪能な教師に熊本聾学校に集合してもらって、平成26年度数回に分けて撮影した。また、どうしても難しい表現は、聴覚障害のある教師が多くいる学校(宮城聴覚支援学校等)で、表現をいろいろ検討してもらいながら、より効果的な表現を工夫しながら撮影した。

今回、このパナソニック教育財団の実践研究助成のおかげでサーバーを置き、web公開することができた。平成27年の4月末にアップして、2700回程度閲覧されている。

英語の授業の手話表現のサイト <http://sign4classroom.sakura.ne.jp/jap/subject/eigo/eigotop.html>

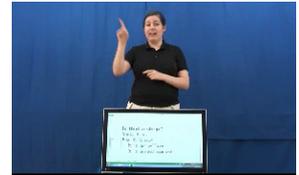
現在、関西や東北等の聴覚支援学校からも、活用していることや感謝の報告を受けている。実際に授業をしていると、さらにいろいろな表現の動画が必要になってくる。今後もデータを追加していく予定である。

⑥⑦ 「アメリカ手話」と「アメリカの手話表現」を分けて述べていく。「アメリカ手話」は、いわゆる **American Sign Language (ASL)** と呼ばれるもので、アメリカの聾者の手話である。これは、日本でいう「日本手話」が日本語と文法的に全く異なる言語であることと同じで、ASL と英語は異なる言語である。そのため、ASL を英語の学習に取り入れるのは、中学、高校の英語の学習に合わないと思われる。外国語活動の導入時の小学生への挨拶言葉や大学において ASL を使うことができる教員から本格的に ASL を学ぶのであれば ASL を使用することは適する。

「アメリカの手話表現」と表記するのは、アメリカの手話単語を英語の文章中の単語に重ね合わせるためである。これを **Signed English (SE)** と呼ぶ。これは、その名の通り、手話ではない。手指英語とも呼ばれ、手話を借りた英語である。あくまでも「英語」なのである。アメリカでも日本と同じように SE は、手話ではないという論争がある。しかし、英語を書いたり、読んだりする力を付けるためには、日本でもそうだが、アメリカでも日本語や英語に合わせた手話単語の並びを理解することが求められる。日本語では、書記日本語と呼ばれている。アメリカでは、SE だけでは足りず、さらに、名詞、動詞、形容詞、副詞なのかすべて品詞までわかるように「y」や「ly」も表現することによって、区別することを主張する **Signing Exact English (SEE)** も進められてきている。

SEE は、品詞等がしっかり区別できるように配慮されているが、時制については「yesterday」が文末にあれば「go」と表現しても「went」の意味を示すと解釈するように、時制表現においては、明瞭な区別がない。しかし、日本人の英語学習者にとっては、「go」と「went」とでは、綴りも発音も大きく異なり、きちんと時制を把握して表現することは大切である。そこで、外国人のための日本語文法指導で広く知られている江副文法に沿って、動詞の過去形、過去分詞形の表現を作ることにした。

また、SE も SEE も三単現や複数形の「s」や助動詞の表現が明瞭に区別されていないので、改めて日本人の英語学習者にわかりやすい表現を作ることにした。ここで、自分たちで勝手に作っていいのかという問題がある。そこで、広く九州内でまずはお互いに共通認識を持ち徐々に広げていきながら、更によりよい表現に変えていくとよりよいものになっていと期待する。



表現についての解説 <http://sign4classroom.sakura.ne.jp/eng/engtop/engtop1.pdf>

英文の手話表現 <http://sign4classroom.sakura.ne.jp/>

このように「アメリカの手話表現」を活用しながら、さらに時制や助動詞などを工夫し、授業を進めてきても、まだ「学習者の負担」が大きい。これは、手話を母語とする生徒たちには、手話、日本語、英語、アメリカの手話表現という4つの言語を勉強させることになってしまうからである。そこで、「和洋折衷」という方法を取り入れることにした。これは、前置詞などの機能語はアメリカの手話表現を使用し、名詞や動詞、形容詞などの内容語(自立語)は、日本の手話表現を使用することである。その場合の注意点として、英語で言いながら(「発語あり」もあるし「口形だけ」の時もある)表現する時に、生徒の中には「I have a tsukue.」と口が動いている場合があるので、授業者はしっかり生徒の口形を見て、英語を表現しているかの確認をする必要がある。

この和洋折衷における手話表現を用いて英語の学習を進めると、全く音声のない生徒でも英会話ができ、意思の疎通も図ることができ、英作文等にも効果的であった。そこで、この和洋折衷の手話表現を Signed English for Japanese (SE4J)と名付けることにした。

- ⑧ 日本語がしっかり身につけていない生徒に、英語の学習が可能なのか、意味があるのかといった疑問は、昭和の時代から課題とされてきている。

確かに、日本語の文法で聴覚に障害の生徒が理解しにくい文章の例として、二重否定の文がある。さらに英語の授業でよく生徒がぶつかる日本語の理解の課題として、「must」の「～(しなけ)ればならない」と「～してはならない」違いがわからないことがよく例示される。しかし、これは手話で表現すると「～する必要」と「～するダメ」で簡単に表現することができる。英文で表すと「must」と「must not」であり、日本語訳も「～する必要」と「～するダメ」で済む。そこで、日本語の獲得は難しいこともあるが、逆に英語を学習することで、日本語の文法確認や定着の一翼を担うことができると発想を転換するとよい。

また、聴覚に障害があろうがなかろうが多くの人々が外国に旅行に行く時代である。アメリカのギャロウデット大学などに留学をしている日本の聴覚障害生徒もいる。英検もリスニングテストは配慮して代替用テロップテストを実施してくださっている。さらには、インターネットを使って、海外の聾学校とスカイプなどで交流ができるようになってきている。これから先はますます生徒たちが意欲的に英語を学習し、英語をいろいろな形で表現できるように支援していくと、海外と交流をすることもでき、さらには、視野を広げ、国際理解教育につなげることができると思う。

## 5. 研究の成果

聴覚支援学校の英語学習におけるアメリカ手話表現の日本の生徒用に改変した Signed English for Japanese の活用は、聴障生徒同士の英会話を可能にし、話す力や書く力を伸ばすことに効果的であった。この検証は、校内においては、定期テスト等の達成度の上昇、また英検等の検定試験では、合格者数の増加に見ることができる。また、授業においては、日本の手話表現も借用することで、児童生徒の学習の負担も軽減することができた。さらに、日本の手話とよく似た手話を使っている韓国の聾学校とも手話や英語を交えて交流をすることができた。

今後は、広く全国で活用してもらい、広く意見を求め、動画のデータの改善や追加を常時行いながら、聴覚支援学校の児童生徒たちの学力向上につなげられるように充実させていきたい。

## 6. 今後の課題・展望

作成した英文の動画を web 公開して、多くの方から「活用している、助かっている」と感謝を伝えられたが、その中に、「スマホで使えるようにしてあるのはありがたいが、パソコンで見ると動画が小さすぎるので、もう少し動画を大きくして欲しい」という依頼があった。確かに、全体で相当数のファイル数になるので、データを小さくしたが、充分サーバーの容量があるので、動画データを大きくし、より使いやすいサイズにデータを変更していく予定である。また、実際に授業で使用していくと、さらに知りたい表現などが出てきているので、随時動画データを追加していく予定である。今後、近隣の国々と英語で更に交流しながら、英語に対する学習意欲を高め、児童生徒の自己実現につながるように教育活動、授業創造を充実させていきたい。

## 7. 謝辞

平成26年度は、英語をはじめ、学校生活や授業で使用する多くの手話表現の動画データを作成したが、九州内の聴覚支援学校に DVD で配付することしかできなかった。平成27年度に、本研究助成を受けるにあたり、サーバーを置いて web 公開することができ、さらに韓国の聾学校と定期的にインターネットを通じて交流したり、さらに教員同士も授業の見学などを通して交流したりできるようになった。ひとえにこの研究助成のおかげである。心から感謝申し上げたい。